する大乘佛教と之の指導に任ずる聖者とを渴仰して止まぬ狀態である。門下學徒よ!!此の絶好のチャンスを完全にキャッチして大乘佛教の發展地たる唐土に日本の眞佛教を移し支那國土の開顯と民衆の救濟を行ふことは大乘佛教、吾宗團、吾門下學徒の大使命であり佛祖の本懷であり滑行である。大法西漸の大使命達成と皇道翼贊新体制確立と相待つて日滿支一体協和し得たならば、こゝに神武聖帝の八紘一宇、光宅天下の天業が恢弘され世界燦然たる眞文明の光輝に浴し興亞の嵐は永遠の大平和建設となり、吾々學徒によりて宗祖の本懷が全ふされるのである今こそ學生學徒の鷹氣を見せ東洋和平の建設橋の基とならんことを誓かつて筆をおく次第である。

於厚德寮

「學び」の觀念

石川是行

「學び」の觀念とは云ふものゝ、此處では、普遍的な名稱としての觀念の問題であり、特殊的分科たとへば、哲學とか、宗教學とか、科學等に於ける、學の觀念を謂ふのでは無い。

而して、私自身、學生の身上で有り乍ら、かうした考へを懷くと云ふ事は、當今の學生氣質から云へば一つの增上慢にも似た逃避者の樣でもあるが、とにかく、私は所謂「學び」に對して此の樣な觀念を有して居る。あまりに、餘々臭いと言つて終へば、それまでゞあるが、私は、私自身の「學び」の觀念を信じ、又それが決して古臭いものでなく、學生として、より新しい「學び」の道を歩むには、ぜひとも、必要な常識でなくてはならないと思つて居る。

日蓮聖人の行學觀が、諸法實相鈔の「あひかまへて　あひかまへて　信心つよく候て三佛の守護をかうむらせ給ふべし。行學の二道をはげみ候べし。行學たへなば佛法はあるべからず。我もいたし人をも教化候へ、行學は信心よりをこるべく候。力あらば一文一句たりとも、かたらせ給ふべし」にあり。又其處に宗祖の「學び」の觀念が發足してゐるのであるが、現今、世間で謂ふ所の「學び」は唯「よく學べ」の意義であり、又その觀念である。即ち、「學び」に包含されなければならぬ「行ひ」を全く忘却して居る。

恐らく、最近の教育を受けたものに對し、尋常小學修身教科書卷一の「ヨクマナベ」「ヨクアソベ」の二語を示して「學び」の意義は何れかと問ふたならば、必ずや「よく學べ」のみを以て指すであらう、私は此處に大きな誤謬があり、又學びの觀念

の本義が失はれ來つた原因を見出し得ると思ふ。幼少年時代はよく父兄より「勉强しろ！勉强しろ！」と頭を搗つかれるものであるが、それは「よく學べ！よく學べ！」と責められる事と何等異らないのであつて、そうした場合、執るべき方法は必ず机に向つて、本を開くのが勤めであり、鉛筆を走らせるのが任務であつた。それが所謂「學び」に對する、中實な態度でもあつた。その結果は「學び」と云ふ事は、かうした者也と心から思ひ込んで終ふ。此の事實が現今の所謂「學び」なる觀念を釀成したものと思ふ。即ち「行ひ」と云ふ事を忘却した學の觀念となり、机上の理論的、空間的な「學び」の修業方法となり、教育界に於ては智育偏重の變体觀念を以て「事足れり」と爲したのも一つの顯れであらう。私は且つて、ある優秀なる一學生の前途を注視した事があつたが、然し彼は、卒業後間も無く坐折して終つた。原因は種々有つたであらうが、最も致命的な打撃は「行」による修養の不足であつた。之を勘へるに、即ち彼は、在學當時非常なる勤勉家であり、努力家の様でもあつたが、「學び」そのものゝ本當の價値を知らなかつたのだと思ふ。所謂机上に於ける學問の優秀さは、他に比ぶべき者も無かつたのであるが、實踐の學問、行ひの學問を全然無視して居たのだと思ふ。私は此の實例を考へて、學校教育に於ける「學問」を一時疑つたのであるが、然し一面振返つて見た時、私は「學問」そのものに對する、自己の觀念が誤つて居た事を知る事が出來た。即ち、學校教育に於ける學の、それには微塵も偏見を有するものでなく、學を受けるもの自身が、主觀を誤り、「學び」の觀念を誤認し、身勝手に「學び」の意義を狹くして、而もその「學び」の中に汲々として一歩も出できない狀態であつた事に考へ付くと同時に、私自身も、その一人であつた事に氣付いたのである。

「學び」の意義に對して、彼の橋本左内は啓發錄に、

「學とは、ならふと申す事にて、總べて、よき人すぐれたる人の善き行ひ、善き事業を迹付きして習ひ參るを云ふ」と言ひ山鹿素行は謫居童問に、

「まなべる事も、行にならはして、考へざれば、皆口耳の學と云ひて、實の學問に非ざる也」と言つて居る。

即ち、「學び」とは「行ひ」あるが故に、その價値が存するのであつて、單なる理論的、指導的、原理的な知性のみで無く實際的、實踐的、實行的に、その「行ひ」の伴ふものでなくては「學び」とは云へないのである。所謂「學び」の觀念は、それでなくてはならない。又「學び」に對する私の主觀的惡避見を是正させて、吳れたものは貝原益軒の次の言葉である。

「師の教へを受け、學問する法は、善をこのみ、行ふを以て、常に志とすべし、學問するは、善を行はんが爲なり、人の善を見ては、わが身に取つて行ひ、人の義ある事をきかば、心にむべなりと思ひかんじて行ふべし」（和俗童子訓）と、故に例へば社會のあらゆる教育意識に於て、此の様な「學び」の觀念を持するならば、人格の錬磨等と言ふ事も、自ら達成せられると

思ふ。云ひ換れば、人格を完成すべき根元は「學び」に有りと斷言し得る「學び」の觀念を持ちたいのである。

最近從來の「學び」の意義が訂正され、その本義に立返へらむとする機運に到來した。即ち「行ひ」と云ふものを「學び」の圏内に呼び戻さうとしてゐる。其れは要するに「學び」そのものゝ觀念を是正せしむる事である。

其處で私は大和俗訓の文を拔萃し、所謂「學び」の觀念を定義し。結論に代へ樣と思ふ。

「學問の法は知行の二を要とす。この二をつとむるを致知力行とす。致知とは、知ることをきはむるなり。力行とは行ふことをつとむるなり。道を知る事明らかならざれば行はれず。たとへば目なきものゝ足すくやかなれど、ゆくべき道を知らで、ゆきがたきがごとし。行ふことするどならざれば、知りても用なし。たとへば目明かなりといへども、足たゝざれば、ゆくことかなはざるが如し。知と行とは目に見て足にゆくがごとし。目くらければ行くべき道見えず。足立たざれば行くことかなはず目足ともにそなはらざれば道をゆきがたきがごとし。知るを先とし、行ひを後とす、萬のこと先づ知らざれば行ひがたし。故に前後をいへば知るを先とす。知るは行はんためなり。知りても行はざれば用なし。故に輕重をいへば行ふをおもしとす。知ると行ふとの二は、一をかくべからざること、鳥の兩翼のごとく、車の兩輪のごとし。學問は知と行と並進むをよしとす。並進むとは、知れることは即ち必ず行ふを云ふ。知と行と、少しの前後はあれど、さきだちおくれず、一度につれだちてゆくをならび進むといふ。知れるばかりにて行はざるは、ならび進むあにらず。

知行の二の工夫を、こまかにわかてば五あり。中庸に曰く博く學び、審かに問ひ、愼んで思ひ、明らかに辨へ、篤く行ふ。是れ道を知りて行ふの工夫にして學問の法なり」と。

戰塵

横山是明

黄昏るゝ湖北の木枯身にしみて戰友の墓標
に聲かくるわれは

召されきて命捧げし身にあれど春近き野に
故郷おもふ

朝霧の深くこもれる漢水に流のどかに艦の
いこへる

—河南の一寒村に於て—